太宰治が16年間変えなかったもの

－統計的分析による文体の研究―

２年Ｚ組　Ｎ．Ｋ ＆ Ｔ．Ｍ

太宰治が１６年間の作家活動で残した一連の作品は、一般に３つの時期に分類される。現在、この３分類に沿って作品の特徴が語られることも多い。この論文では、それぞれの時期の文体の特徴を統計的手法で比較検討した。結果として、３つの時期の特徴は確かに見いだせるが、一方で共通して現れる特徴も見つかった。それは、一文が８０文字以上の長文が意図的に含まれている点である。この特徴は初期の作品からみられ、後に３つに分類される作家活動期間とは関係なく、太宰治が一貫した表現の形式を追及していた可能性がある。

１．はじめに

太宰治には暗いイメージしかない、という理由で太宰作品を敬遠する人も多い。実際、時期にもよるが、太宰は自身の存在の罪の意識、滅びゆく生をテーマにした作品を多く書いている。

　だが、太宰の作品は今日まで多くの人々の共感を呼んできた。何か大きな力を持つ作品であることは確かである。

太宰治が１６年間の作家活動で残した一連の作品は、一般に３つの時期に分類されるといわれる。しかし、太宰治の文体もそれと同様に変化しているのだろうか。その点に疑問を持った私は、太宰作品を文体の視点からとらえ直し、統計的手法で分析することで、その特徴を探っていくことにした。

２．作家活動以前の太宰の経歴

　太宰は、1909年に青森県下屈指の大地主、金木村の津島家に生まれた。乳母、叔母、子守に養育された太宰は、肉親の愛情に対する疎外感とともに、乳母が太宰の母性像となっていった。

　弘前高校時代に、敬愛していた芥川龍之介が自殺し急激に変貌。学業を放棄し、自身が搾取階級という負い目を感じ始めるようになる。１９２９年に芥川の模倣と思われる自殺を図るも命拾いし、その後東大仏文科に入学。小説家の道を志し、井伏鱒二に師事する。その後も女性と心中未遂を起こし一人助かっている。23歳の時に、左翼非合法運動から転向し、1933年「魚服記」をはじめとした小説を書き始める。

３．分析方法

(1) 対象となる４つの小説群

太宰治の作家活動は，国語の授業で使う「常用国語便覧」によると、主に第一期、第二期、第三期に分けられるという。それぞれの時期の代表的作品を集めた文庫本の作品集を使って文体を調べた。

第一期は1933年から1937年で、この間の代表作品として、文庫本「晩年」（新潮文庫）を資料として使うことにした。これは「魚服記」をはじめとする十五の小品が集められている短編集である。これらの短編集が、後に「晩年」という名の短編集となり、この第一期は「死を意識した遺書としての小説群」（常用国語便覧）と呼ばれている。

また第二期は1938年から1945年といわれており、この間の代表作品として「走れメロス」「東京八景」など8編が収められた短編集「走れメロス」（新潮文庫）を分析に使った。この第二期は、「走れメロス」に代表されるように「生命の充実を得て」「明るく透明感のある作品群を残」（常用国語便覧）した時期といわれている。

第三期は１９４６年からであり「人間失格」（角川文庫）を資料として使った。ここには「人間失格」と「桜桃」がおさめられており、太宰治の最後の作品となった。この１９４８年に太宰は、「山崎富栄と薬物を飲んで玉川上水に身を投じ、命を絶った」（常用国語便覧）。39歳であった。この第三期は、坂口安吾・石川淳らとともに新戯作派と呼ばれ人気作家となっていたが、一方で彼の体は過労と飲酒により蝕まれていたという。

なお作品の分析には、現代の作家の作品も一つ選んで使うことにした。現代の人気作家 住野よるの「君の膵臓を食べたい」（二葉文庫）である。以上の小説群を以下では4つの群と呼ぶことにする。

1. 文体の統計的な分析方法

　分析方法は、数学の問題集Focus Gold 数学Ⅰ+A 288ページから291ページにある「度数分布表とヒストグラム」の例題がヒントとなった。具体的には、以下のような方法をとった。

* 1. 一文の長さの比較

１つの群から５０の文を無作為に選び、文の長さを調べヒストグラムに表す。

* 1. 句読点の数の比較

１つの群から無作為に10ページ選び、そのページの句読点の数を調べる。

　この方法で、４つの群を調べヒストグラム化した。

４．４つの群の結果

1. 一文の長さの分析結果

ヒストグラムの数字は例えば30は

30～39の30台の数字を意味する。

第一期

第二期

第三期

他の作者との比較

(2) 一文の長さの比較から分かったこと

①　３分類のそれぞれの特徴

　ヒストグラムを見ると、太宰作品を３つの時期に分類するのは妥当性があるように見える。第一期は短文から長文まで自在に使われており、第二期では７０文字以上の長文はなくならないものの、ほぼ５０文字までで、「明るく透明感のある作品」を構成していることが推察できる。ところが、第３期は８０文字以上の長文の出現頻度が４０％を超え、明らかな特徴となっている。

②　７０文字以上の文の存在

ところが、この３分類に共通する特徴も見えてくる。その特徴とは、比較に使った住野よるの「君の膵臓が食べたい」と比べて、７０文字以上の文が存在することである。

第一期が文の長さが短いものから８０文字以上の文までほぼ同じような出現回数であるのに比べて、第二期、第三期では、６０文字台がなくなり７０文字以上の文は存在しているのである。

特に80文字以上の長文とはどんなものなのだろうか。一例を「人間失格」の中からあげてみたい。

自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さにガタガタ震える思いで口にご飯を少量ずつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度三度ご飯を食べるのだろう、実にみな厳粛な顔をして食べている、これも一種の儀式のようなもので、家族が日に三度三度、時刻をきめて、薄暗い一部屋に集まり、お膳を順序正しく並べ、食べたくなくても無言でごはんを噛（か）みながら、うつむき、家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかもしれない、とさえ考えたことがあるくらいでした。

（太宰治「人間失格」（角川文庫）より）

　このように、一文が８０文字以上というのは、独り言のような状況に読者を誘い込み、耳元で登場人物がつぶやいているような場をつくりあげている。

(3) 句読点の数の分析結果

第一期

第二期

第三期

他の作者との比較

(4) 句読点の数の比較から分かったこと

「君の膵臓が食べたい」を見ると句読点の数は30個台であるが、太宰の作品は40から50個台になっている。文庫本では、出版社によって文字数が1ページにつき20文字ほどのずれがあり、比較するには句読点の数の誤差が2，3個ある。しかし、それを考慮しても、太宰の作品は句読点の数が多いということが言える。

句読点を多用する太宰の作品は、どのような表現を生み出しているのだろうか。前述した「人間失格」の引用部分を見てほしい。この引用文も、句読点が多用されている。

つまり、一文の長さを通常より長くし、句読点を多用することで、ぽつりぽつりと告白をしているかのように感じられる文体を生み出している、と見ることができる。

５.太宰治作品の文体についての考察

これまでの分析から、太宰治は一文の長さを変化させたり、句読点を多用する自分の文体を初期に生み出し、その後発展させていったと考えることができる。特に、80文字以上の長文を使うところが彼の特徴となっている。

太宰治のデビュー作「魚服記」にその文体の萌芽を見ることができる。馬禿山（まはげやま）の奥に十丈近くの高さの滝があり、その滝壺（たきつぼ）の近くに炭焼きをしている父親が作った小さな茶屋がある。15歳になる娘スワはそこに店番としている。そのスワが小さいとき父親から聞かされた話が出てくる場面である。

いつか父親がスワを抱いて炭窯の番をしながら語ってくれたが、それは、三郎と八郎というきこりの兄弟があって、弟の八郎が或る日、谷川でやまべというさかなを取って家へ持って来たが、兄の三郎がまだ山から帰らぬうちに、其のさかなをまず一匹焼いてたべた。（120文字句読点含む）

父親が滝にまつわる話をしてくれるとき、この長文は始まる。父親の話の中で、この八郎は兄の三郎にやるはずの魚も食べてしまい、無性にのどが渇き始め川端にまで行って水を飲むと、体中にうろこが噴出し、大蛇になって滝壺の中に行ってしまう話である。

太宰は、この「魚服記」で起こる結末を予感させるかのような話を挿入し、父親に語らせるときに、この1２０文字に及ぶ長文を使っている。読み手は思わず物語の中に引き込まれてしまい、些細な罪から起こる兄弟の別れを、全体のモチーフに重ねていく。

しかし、第二期は作風が明るくなり、これまでの作品とは違うということが言われている。常用国語便覧にも「（結婚後第二期は）生命の充実を得て、健全な市民生活と文学との調和を図った太宰は、明るく透明感のある作品群を残す。」とある。

第二期に相当するグラフでもたしかに長文が減少してはいるが、なくなってはいない。句読点の数はむしろ第一期より増加しており、長文も効果的な部分でうまく使われていることが推測できる。彼の第二期の代表的作品「走れメロス」の中にもその長文はある。簡潔で歯切れのよいスピード感あふれる文章が続いていく中で、メロスは山賊に襲われ三人を打ち倒すが、それで力尽きようとしたときの文章が以下である。

一気に峠を駆け下りたが、流石（さすが）に疲労し、折からの午後の灼熱の太陽がまともに、かっと照ってきて、メロスは幾度となく眩暈（めまい）を感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三歩歩いて、ついに、がくりと膝を折った。

この105文字（句読点含む）の長文は、メロスが精魂尽き果てる様子を見事に表現している。

第三期の人間失格の小説群では、この長文が、一人の人間の告白の場を生み出していることはすでに述べた。太宰治の１６年間の作家活動が一般に第一期から第三期までに分けられていることと、文体の変化とは区別して考えるべきである。むしろ、太宰は作家活動を始めた２３歳のころから、長文を使用する意味についての自覚があり、自分の文体を意識的に発展させ、「人間失格」にたどり着いたとみるべきだろう。

６．補足

数学の問題集の中に「二人の小説家Ａ，Ｂの各文章の特徴を調べるために「文の長さ」に注目した。それぞれが書いた小説から50の分を無作為に選び、その文字数を記録したものが以下の数値である。」という問題を発見しなかったら、この論文で、太宰治の文体の秘密に迫ることはできなかった。数学に感謝したい。

参考文献

「常用国語便覧」

Focus Gold 数学Ⅰ+A

「太宰治の『晩年』」山内祥史（著）秀明出版会

「晩年」太宰治（著）新潮文庫

「走れメロス」太宰治（著）新潮文庫

「人間失格」太宰治（著）新潮文庫

「君の膵臓を食べたい」住野よる（著）双葉文庫